

2022/10/24 (月)

朝の礼拝

聖書 マルコによる福音書 14章 3-9節 (新約聖書90頁)

イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家において、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粹で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。そこにいた人の何人かが、憤慨して互いに言った。「なぜ、こんなに香油を無駄遣いしたのか。この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに。」そして、彼女を厳しくとがめた。イエスは言われた。「するまますまにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときに良いことをしてやれる。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではない。この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。はっきり言うておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」

香りの告白

イエスは病いのシモンの家で食事をしていました。病人は天罰を受けた罪人です。彼らの罪を赦すイエスは神を冒瀆していると命を狙われました。そこへ一人の女が三百デナリオン（約三百万円）の香油の入った壺を割り、イエスの頭から注ぎかけました。

どうして当時の女性がそんな高価なものを持っていたのか。名もない一人の女が、罪人の家に、男ばかりの、食事の最中に突然現れ、無言で壺を割り、なんて無駄なことをしたのか。ただ、ただ、彼女のイエスへの一途な思いだけが伝わってきます。

香油を塗るのは死者の埋葬を意味していました。彼女はイエスの死が近いと知り、惜別の悲しみの中で香油を注いだのです。彼女にとって香油の香りは十字架の血の香りでした。残酷にも心が引き裂かれるような時に、互いの思いが一つになったのです。

イエスが十字架にかかることは神のみ心でした。イエスも最後まで嘆き祈り、叫びました。でもイエスは彼女のしたことをそのまま受けとめ、忘れられることはないと言っています。彼女の行為はイエスに神のみ心への信頼を深めさせたのかもしれない。

(しばらく黙想しましょう)

(祈りましょう)

ナルドの香油を注がれた主よ、あなたはあなたと共に十字架の道を見つめる一人の女の行いを喜んで受けられました。神様の御心に沿った悲しみは悲しみで終わりません。そしてあなたの約束を信じ、日々感謝のうちに、互いに慰め励まし合う者には、あなたがいつまでも共にいることを示してくださいました。今日一日もすべてをあなたに委ね、よき学びのうちに過ごさせてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン